バカと速攻と昆虫少年

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと速攻と昆虫少年

【Ｎコード】
Ｎ１４９５ＢＡ

【作者名】
榊

【あらすじ】
文月学園二年Ｆクラス所属、七伏博人。昆虫をこよなく愛し、昆虫少年の異名を持つ彼。そんな彼の兄や幼なじみ、そして級友達を交え、我が道を走りながらも愉快に学園生活をおくっていく。そして最近はいろいろ逃げ道がない。そんな彼の召喚獣の戦い方、それは『速攻』。
「殺られる前に殺りつづければ殲滅完了だ」
「はいはいチートチート」
駄文になりますが、お付き合いいただけると嬉しいです。偶数日の

定期更新です。
※間違えて削除してしまったため再投稿しました。

第一問

第一問

校舎へ続く道が桜に彩られる新学期。

僕は双子の兄である行平（ゆきひら）と幼なじみの佐藤楓（さとうかえで）、通称メープルと共に坂道を登っていく。

ちなみに桜の品種のソメイヨシノは全てクローンなので、条件が揃えば同時期に咲く。そのため開花予想もできるのだ。

他愛もない雑談をしながら歩くと玄関の前に西村先生、通称鉄人が立っていた。

「「「おはようございます」」」

「ああ、お前たちか。これがクラス割だ」

そういって渡されたのは茶色の封筒。

適当に開けると中にはFの文字、つまりこの学校の最低クラスが書いてあった。

「そっちはどうだった？」

二人に聞いてみると、Ａクラスだとかえってきた。

「残念だがこれもルールだからな」

西村先生に声をかけられる。

うん、僕がＦクラスなのは、ルールである以上仕方がない。

「うう・・・ハクと一緒が良かったっす」

「～っす」というのはメープルの口調。

これはキャラ作りらしい。何でだろうね？

ちなみにハクというのは僕、博人のことだ。

「試召戦争、頑張って下さい」

デフォルトで丁寧なのは行平の口調だ。

紳士的な人間（腹黒）が行平の特徴といえよう。

そして二人と別れ、今Ｆクラスの前に立っている。

ドアを開けると、畳と卓袱台、座布団という斬新な設備の教室がひろがっていた。

ああ、今日もいい天気だなぁ。

……

……

……

……

ダメだ、この現実からは逃げられない。

えらい人は言いました。

現実がダメならーーーー

「……（読書中）」

ーーーー読書があると。

第一問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、どしどし書いてください。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第二問

第二問

しばらく現実逃避《読書》していると、僕を呼ぶ声が聞こえた。

「自己紹介をおねがいします」

いつの間にか自己紹介の順番になっていたようだ。

「七伏博人〔ななふしはくと〕です。趣味は昆虫採集です。よろしくお願いします」

席についてふたたび読書を始める。

少したってから、教室のドアが開かれた。

そこには息を切らせて胸に手を当てている女子生徒と、従姉である杉本秋音〔すぎもとあきね〕。ウチに居候中の背の低い（中学生くらい）物理教師だ。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんと杉本先生もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・・」

つづいて秋音姉。

「私は杉本秋音。Ｆクラスの副担任の物理教師だよ♪よろしくね！」

その後本来Ａクラスにいるはずの姫路さんが何故Ｆクラスにいるかという話になったが、風邪による途中退席が原因だそうだ。

僕の場合は色々あっての遅刻なんだけど。

教卓がぶっ壊れたり、なんやかんややっているうちに、最後の自己紹介になった。

「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

坂本雄二。高身長で、タテガミのような髪が特徴の僕の悪友。

「さて、皆に一つ聞きたい」

雄二は教室内の各所に目を移す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Ａクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがーーー」

一呼吸入れて静かに告げる。

「ーーー不満はないか？」

『大ありじゃぁっ！！』

ですよね～。

そして雄二はその状況を改善するため、あることを提案した。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

第二問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第三問

第三問

Ａクラスへの宣戦布告。

クラス内からも否定的な意見がでるほどＡクラスとＦクラスの戦力の差は明らかだ。

ここ文月学園では、上限の無いテストの点数に応じた強さの自身をデフォルトした召喚獣を使い、クラス間での戦争が行われる。

つまり、学力が最高のＡクラスとＦクラスでは天と地ほどの差があるということだ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

その戦力差を知りながらも、雄二は堂々と宣言した。

そして、Ａクラスに勝てるという根拠をこれから説明したくれるらしい。

まず始めに呼ばれたのは畳に顔をつけて姫路さんのスカートを覗いていた土屋康太。

顔に残る畳の後を隠しながら壇上にあがる。

「こいつがあの有名なムッツリーニだ」

「……！！（ブンブン）」

ムッツリーニ、簡単に言うとムッツリスケベだ。

ただし、そのムッツリ度は常人の比ではない。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

試召戦争に至るとしたら強力な戦力となるだろう。

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。演劇部のホープで、双子の姉の木下優子が有名だ。

そして途中にキングオブバカ、吉井明久をバカにした後ぼくの名前がよばれた。

「七伏博人。こいつはこのクラスの秘密兵器といってもいい。皆も昆虫少年という名前は聞いたことがあるだろう」

『Aクラスレベルって話だよな』

『運動もすごいってきいたぜ』

『まさに秘密兵器って訳だ』

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

別に誤字ではないと思う。

明久は最初は渋っていたが、あっさり騙されて意気揚々とDクラスへ向かっていた。

「騙されたぁっ！」

「やはりそうきたか」

満身創痍といった体の明久が転がり込んできたが、別に予想通りだったので特にリアクションはしなかった。

「あの程度でだまされる明久がわるかったんだよ」

さて、これで本格的にDクラスと戦争になるわけだが僕の役目は秘密兵器。

つまりなにが言いたいかっていうと、Dクラス戦では秘密兵器はずっと秘密だったってことだ。

結果は、相手の代表に姫路さんが奇襲をかけておわったそうだ。

第三問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第四問

第四問

Dクラス戦が終わり、行平とメープルと一緒に帰る。

「試召戦争ご苦労様でした」

「最終目標はAクラスってとこっすか？」

「うん、そうだよ。というかいつも通りのしゃべり方でいいんじゃない？」

メープルの『～す』という口調は本人曰わくキャラ作りだそうだ。

いつもは普通の口調なんだけど、何か意味あるのかなぁ？

「ねえ、それじゃあさ、ちょっと勝負してみない？」

ふむ、勝負か……。

「内容によるね」

「ハク達がAクラスに勝ったらハクの、負けたら私の言うことを聞くっていうのはどう？」

「うん、乗った」

実は結構賭事好きだったりする。
ちなみに一番好きなのはポーカーだ。
でも、わざわざ勝負を仕掛けてきてまで、僕に聞いてほしいことがあるのだろうか？
「それじゃ、また明日！」
メープルの家の前で別れ、すぐ隣の我が家に入る。
明日は点数補充テストがあるので一通り教科書に目を通しておく。

翌朝、いつも通り学校に向かう。
今日は昨日試召戦争で消費した点数の補給テストになる。
僕としては、このテストが今後の戦力となるので少し気合いを入れてやっておく。
おそらく、雄二は強力な駒である僕を、重要な位置で使うだろう。
つまり、Ｆクラスの勝負は僕にかかる。
Ａクラスと戦う前に負けては、約束が果たせない。

せっかくの試召戦争、楽しい戦いをしないと。

第五問

第五問

４教科のテストが終わり、昼休みとなったのでＦクラスのいつものメンバーと行平とメープルを加え弁当を食べていたのだがーーー

ガクガクガクガクガクガクガクガクガク

姫路さんの弁当を食べたムッツリーニと雄二が大ダメージを負って倒れていた。

生存者で作戦会議を行い、僕は一つの結論を出した。

（僕達は自分の弁当あるから、姫路さんの弁当は遠慮させてもらう）

（私もまだ死にたくないっす）

（頑張って下さい）

見捨てましょう♪

（そんな！ひどいよ！）

（俺達は仲間だろ！）

明久と復活した雄二が生贄を増やそうと必死だが、無視して三人で和やかに食事を再開する。

雄二が犠牲となることで場がおさまったと思ったが、デザートがあり、秀吉がさらなる犠牲となった。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん」

「あれ？私達が聞いても良いっすか？」

「ああ、別にお前たちは大丈夫だろ。博人と戦いたいだろうしな」

「そうですね。公式の場で雌雄を決するというのも、楽しそうです」

「私が相手をするっすから、ユキは控えてていいっす」

「いえいえ、兄弟対決とういのもおもしろいではありませんか？」

「まあまあ2人とも。どうなるかはわからないんだし、今は保留で良いでしょ」

姫路デザートで死にかけた秀吉に明久が大量に茶を飲ませている。

確かに抗菌作用があるが、姫路さんの料理に入っているのは化学物

質だから効果は得られないだろう。

「相手はＢクラスなの？」

「ああ。そうだ」

Ａクラスを目標とするのに、なぜＢクラスと戦うのかという島田さんの質問だが、おそらくＡクラスと有利な状況で戦うためにＢクラスを利用するつもりだろう。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃには勝てやしない」

雄二らしくもない戦う前からの降伏宣言。

Ａクラスの約四十人はＢクラスよりも少々点数が上のふつうの生徒だ。

しかし残り１０人の点数はずば抜けて高い。

Ｆクラスのふつうのメンバーでは全員で取り囲んでもやられてしまうだろう。

だから雄二は一騎打ちに持ち込む作戦のようだ。

Ｂクラスはそのための脅しの使うつもりらしい。

今回も明久がＢクラスへの死者（使者）にされ、役目を果たしてボロボロになって帰ってきた。

第五問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第六問

第六問

Bクラス戦。今回はまずは防御側にまわり、雄二の護衛として掃除用具入れに隠れていた。

俺が呼ぶまで出てくるなという雄二の指示通り、ずっと。

現在、Cクラスに不穏な動きがあり、不可侵条約を結ぼうということになった。

しかし、引っかかる事がある。

Cクラスの代表とBクラスの代表が付き合っているという噂のことだ。

「雄二！不可侵条約を結ぶのに、僕も連れて行ってほしい！」

掃除用具入れの中なので、大きめの声で叫ぶ。

「……分かった。出てこい」

意図を察してくれたのか、少し考えてから了解してくれた。

秀吉を残して、Cクラスに向かう。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

前に出てきたのは、気が強そうな女子の小山友香さんだ。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふぅん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねぇ……。どうしようかしらね、根元クン？」

予想通り、教室の奥から根元恭二が現れた。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？根元君！Bクラスの君がどうしてこんなところで！」

Fクラスをはめるためです。

取り巻きも7人ほど見える。ちょうど良い。

4時までに決着がつかなかったら翌日に持ち越しという協定を盾にして、攻撃を仕掛ける…か。残念ながら予想通りでしかないこの作戦はもう意味が無い。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚をーー」

「Ｆクラス、七伏が受けます。試獣召喚」

雄二達を教室から逃がし、相手と向き合う。

チャンスは簡単にピンチに変わるってことをしっかり教えてあげよう。

「Ｂクラスの皆さん。コレだけでは役不足なので、まとめてかかってきてください」

Ｆクラスの生徒にバカにされたからか、簡単に挑発にのってくる。

『試獣召還！』

残りの六人も召還をし、点数が表示される。

『Ｂクラス　モブキャラ×７
数学　　平均１５０くらい

Ｆクラス　七伏博人
数学　　６８４点』

僕の召還獣は武器は両手のクロー、足の鉤爪、肘のブレード。防具はすねのアーマーと全身にフィットしている服だけだ。

相手が動き始める前に一人目に肉薄し、クローで頭を斬る。

そのとなりの二人目は肘のブレードを突き刺す。三人目は膝蹴りを食らわせ、四人目と五人目は両手を広げてクローで同時に斬りつけ

る。

六人目を七人目の方向へ蹴り飛ばし重なったところをかかと落としで決める。

流れを乱さず、４秒程度で始末を終える。

教室を見回すと、慌てて逃げる根元の姿が見えたが雄二達と合流する事を優先し、教室を後にする。

実際１分位しかＣクラスにいなかったので、すぐに追いつく。明久と島田さんがみえないが、教室外に配置された追撃部隊を引きつけているらしい。

作戦は把握しているし、行平とメープルが待っているので一足先に帰るとしよう。

第七問

第七問

この戦争の勝者に戦争を仕掛けるであろうＣクラス対策に
秀吉を要とした作戦を行う。

僕がつっこんでもＣクラス相手だと殲滅に２０分位かかるから、無
駄な戦争はやらないに越したことはないだろう。

今回の作戦は秀吉に女子の制服を着せて双子の姉であるＡクラスの
木下優子の演技をして挑発してもらい、Ｃクラスの敵意をＡクラス
に向けようというものだ。

僕が行平の真似をするという意見は始めからない。顔は結構似てい
るが、身長が僕の方が明らかに低い。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

同性の着替えなのにガン見している明久の考えがよくわからない。

「……（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムッツリーニは指が擦り切れるんじゃないかってほどの速さで連写していた。

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

僕にもなぜクラスの皆が複雑な表情をしているのかわからない。

「まあ、とりあえずCクラスに行こうよ」

「ああ、そうだな」

「うむ」

秀吉を連れて教室を出て行く。

「あ、僕も行くよ」

その後を明久が慌てて追いかけてくる。

FクラスからCクラスまでは結構離れているので、しばらく歩く。

「それじゃあ秀吉、ここからは一人でお願い」

Aクラスの使者になりすますので、僕達は同行できない。

よって、離れた場所から様子を窺う。

「気が進まんのう・・・・・」

「そこを何とか頼む」

「むう……。仕方ないのう……」

「とにかくCクラスを挑発してAクラスに敵意を抱くように仕向けて。頼んだよ、演劇部のホープ」

「あまり期待はせんでくれ」

ガラガラガラと秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

……おおう。

「流石だな、秀吉」

「意外とノリノリだね」

「うん。これ以上はない挑発だね……」

この時点でCクラスの敵意はもうAクラスに向いていることだろう。

『な、何よアンタ！』

この声は昨日会ったCクラス代表の小山さんのものだろう。

当然だが、いきなり豚呼ばわりされて怒気を含んでいる。

『話しかけないで！豚臭いわ！』

自分から来くせに豚臭いというツッコミどころ満載のセリフだが、Cクラスからツッコミの声はあがらない。

まさかCクラスはツッコミが不足しているのか？

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！』

知名度としては秀吉よりAクラスの優子のほうが高い。

そもそも女装しているので簡単には見分けがつかない。その上挑発して冷静に判断ができないようにしている。

かなり良い作戦と言える。

……木下さんの風評以外は。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！　言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですっ　て！？』

いや、誰もFクラスとは言ってないうえに、豚小屋の方がFクラスより衛生的だと思う。

『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備　もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が

薄汚　いブタの貴女達を始末してあげるから！』

そう言い残し、靴音を立てて教室から出てきた。

「これで良かったかのう？」

どこかスッキリした顔で秀吉が近寄ってくる。

「それはもう素晴らしい仕事ぶりだったよ」

『Ｆクラスなんて相手にしてられないわ！　Ａクラス戦の準備を始めるわよ！』

「作戦もうまくいったし、僕達も今日の戦争の準備をしよう。あと１０分で始まるよ」

第八問

第八問

Bクラス戦が始まってからしばらくすると、戦線にいるはずの明久が駆け込んで来た。

「雄二っ！」

「うん？どうした明久」

「脱走だったらチョキでシバくよ」

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

どうやら今は冗談に付き合っている暇はないらしい。

それを察して真面目な顔で向き合う。

「根元君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があったんだ？」

明久は真面目な顔で男子の制服を欲しがる変態だったのか……。

「ま、趣味は人それぞれだからね」
「そうだな、勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」
「で、話はそれだけ？」
本当にこれだけだったら半殺しにしても文句は言われないだろう。
「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」
「理由は？」
「理由は言えない」
どうやらこっちが本題ってことかな。
「どうしても外さないいダメなの？」
「うん。どうしても」
雄二が顎に手を当てて考え込む。
貴重な戦力である姫路さんを戦闘から外すなんて自殺行為といってもいい。
「頼む、雄二！」
明久は深く頭を下げてくる。

ノーリターンでハイリスク。はっきり言って無謀だ。

「……条件がある」

「条件？」

「姫路がやるはずだった根元に攻撃をしかける役目をお前がやれ。」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

おっと、そろそろ僕も行動開始の時間のようだ。

「明久。お前にはお前の強みがある。それをうまく使ってみな」

一言残し、教室を出て行く。

第九問

第九問

『お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

遠くから根元の声が聞こえてくる。

『どうした？軟弱なBクラスの代表サマはそろそろギブアップか？』

姫路さんを戦闘に参加させていないので、雄二率いる本隊も出動せざるを得なくなったのだろう。

『はァ？ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前ら相手じゃ役不足だからな。負け組代表さんよぉ』

『負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

『……さっきからドンドンと、壁がうるせぇな。何かやっている

のか？』

『さぁな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！一旦さがるぞ！』

さてと、そろそろ出番かな。

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか？』

退却を始める雄二達と入れ替わるように廊下の窓から校舎に入る。

「Ｆクラス、七伏博人がここにいるＢクラス全員に化学勝負を申し込みます。試獣召還！」

『Ｆクラス　七伏博人
化学　　６７２点』

「速攻で殲滅だ！」

フィールドを駆け抜けながら殲滅をする。

こんなヤツらじゃ弱すぎて話にならない！

「だぁぁーーっしゃぁーっ！」

明久がＤクラス側の壁をぶち破って入ってくる。

物理干渉能力をもつ、観察処分者ならではの作戦だ。
しかし、彼らはＢクラスの近衛兵に囲まれてしまう。
ちょうどこちらはＢクラスの殲滅戦が粗方終わった。
ちょうどそこに保体教師を連れてムッツリーニが窓からやってくる。
「……Ｆクラス、土屋康太」
「待った！ムッツリーニ！こいつは僕が片づける！先生、根元恭二に勝負を申し込みます」
明久達が近衛兵を引きつけたので、丸裸になった根元。これで詰みだ。
『Ｂクラス　根元恭二
化学　　１９８点
Ｆクラス　七伏博人
化学　　６３２点』
「少しは面白い戦いができると思ったんだけど、残念だ」
先ほど召喚した召喚獣をそのまま引き連れてクローで一閃。
これでＢクラス戦は終結した。

第十問

第十問

「ずいぶん思い切った行動にでたね。明久」

終戦後、拳をおさえている明久に、声をかけておく。

「うぅ……。痛いよう、痛いよう……」

１００％全てがフィードバックしないとはいえ、素手で鉄筋コンクリートを壊したのだからその痛さは並みじゃない。

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことは考えず、自分の立場を追い詰める男気溢れる作戦だったね」

「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

何を行っているんだ明久は？

「その通りだけど」

「ウキィーー！」

いきなり襲いかかってくるので、鳩尾に拳を叩き込んで黙らせる。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二がバンバンと明久の肩をたたく。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込んでいる根元。さっきまでの強気が嘘のようだ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素手な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲が騒ぎ始める。

カン！カン！カン！

「静粛に！静粛に！前にも言ったけど僕達の目標はＡクラス。ゴールはここじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

その言葉でクラスの皆が納得したような顔になった。
Dクラス戦でも同じことを言っただろうから、雄二の性格を皆理解し始めたんだろう。
「……条件はなんだ」
「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」
「俺、だと？」
「ああ。お前には散々好き勝ってやってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」
凄い言いようだが、誰もフォローしない。それだけのことをやっているからだ。
「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」
おそらくこれがAクラス戦との取引材料になるのだろう。
「Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられないからな。あくまで　も戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」
「・・・・・・それだけでいいのか？」
それだけな訳がないだろうが。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言って雄二が取り出したのは秀吉の時と同じ、女子用の制服。

これは明久の要望を叶えるためと、雄二の個人的感情だろう。

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたこと　を・・・・！」

根元が慌てふためく。そりゃあ嫌だよね。

ま、嫌がっても関係ないし。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守られるなら、やらない手はないな！』

何よりBクラスからの声援もある。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふぅっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

一瞬で根元を見限って腹部に拳を打ち込むＢクラスの男子。

いい仕事するね。

「では、着付けに移るとするか。明久、まかせたぞ」

「了解っ」

明久はぐったりと倒れている根元に近づき制服を脱がせる。

ここからは見ていて毒なので身を翻して帰宅を決意した。

第十問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第十一問

第十一問

Bクラス戦が終わり、2日たった。

残すはAクラス戦のみとなり、もうすぐ別れる予定のFクラスの教室で最後の作戦の説明をしている。

「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは俺の偽らざる気持ちだ」

まあ、Fクラスなのにここまでこれたのはたいしたことだと、僕も思う。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいてもんじゃないという現実を突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねぇんだーっ！』

勉強だけじゃないからって疎かにしていいわけじゃないけどね。

「今日のＡクラス戦だけど、一騎打ちで決着をつけたいと思う」

雄二の隣で説明すると、教室中にざわめきが広がった。

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバンと机を叩いて静まらせる。その衝撃で壊れないか心配だ。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

実際誰が考えても不可能だと思うが、それをあえて作戦とするのだから裏があるのだろう。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなぁぁっ！？」

裏を読めない馬鹿は雄二からの洗礼としてカッターが頬を掠めた。

「次は耳だ」

「顔面じゃなくて良かったね、明久」

耳なら当たっても生きていけるだろう。

「まぁ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

「だけど、それはDクラスとBクラスの時も同じ。まともにやりあったら勝てなかった」

だけど僕達は勝ち進んできている。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、Fクラスは入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

Aクラスを手に

最初は皆勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いた雄二の言葉だ。それを否定する人間はこのクラスにはいないだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおぉーーーっ!!』

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

霧島さんが日本史が不得手としているとも、雄二が得意としているとも聞いたことはない。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式　は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生レベルで上限あり。　この内容だと満点が前提になり、ミスをした方が負けるといった注意力が勝負の鍵となる。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくな　い？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「？？それなら、霧島さんの集中力を乱す方法でも知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

先生の監視がある中での妨害程度で主席がミスするとは思えない。

「雄二、あまりもったいぶらないでそろそろタネ明かししてたほうがいい」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

「雄二がこのやり方を採ったのは、ある問題が出れば、霧島さんは確実に間違えるから、だよね？」

「ああ、ある問題ーー『大化の改新』が出ればアイツは必ず間違える」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

小学生レベルで出てこないって自分で言っているんだから、ほかの問題だよ。勝手に結論を出すのは愚かしいぞ。

「もっと単純に、何年に起きた、とかじゃないかな？」

「ビンゴだ博人。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

こんな基礎的な問題を学年主席が間違える……雄二がそのことを知ってるってことは、何か繋がりがあるはず。

「大化の改新が起きたのは、６４５年」

「こんな簡単な問題、明久ぐらいじゃないと間違えない」

「だが、翔子は間違える。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

さっきから少し気になっていたけどーーー

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

さっきから霧島さんのことを、アイツとか翔子とか呼んでいた。

ここで解答を間違えると明久達に襲われるだろう。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙えぇっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Ａクラスの前にキサマを殺す！」

「待て、そんなこと言うなら博人はＡクラスの佐藤楓と毎日一緒に登下校しているぞ」

「うん。メープルとは幼なじみだからね」

「聞いたか！？今愛称で呼んでいたぞ！狙うならコイツが先だろ！」

愛称って言うほどじゃないと思うけどなぁ。

佐藤楓→さとうかえで→サトウカエデ→メープルってだけだしね。

現在ほとんどの男連中が僕に向かって上履きを構えている。

「なに？やるつもり？」

カッターを投擲姿勢で構えて笑顔で問いかける。

このクラスをまとめるには武力が適していると思う。

『……』

よし、鎮圧成功。

何故か明久が島田さんと姫路さんに戦闘態勢を取られているがこの際無視していいだろう。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

幼なじみだから弱点を知っていたということか。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

でも今回はそれが仇となるってわけだ。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机はーーー」

『システムデスクだ！』

第十二問

第十二問

「一騎打ち？」

「ああ。Ｆクラスは試召戦争としてＡクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二と、僕、明久、姫路さん、秀吉、ムッツリーニと首脳陣が勢ぞろいだ。

しかしこれでは明久がボロボロにならない。少々残念だ。

「うーん、何が狙いなの？」

雄二と交渉のテーブルについているのは秀吉の姉、木下優子だ。

「もちろん俺達Ｆクラスの勝利が狙いだ」

木下さんが訝しむのも当然だろう。下位クラスの僕達が一騎打ちで学年トップに挑むのはあまりに不自然だからだ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたい

けどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要は無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返答。ここからが交渉の本番だ。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……。昨日来ていたあの　……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い戦線布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期間　を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね？」

試召戦争の決まりである、準備期間。

泥沼化を防ぐために、敗北したクラスは3ヶ月間試召戦争を申し込む権利を失うというものだ。

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約には何の問題もない……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

これは今まで設備を入れ替えなかったからこそできる方法だ。

「……それって脅迫？」

「もちろん！」

自信満々で答えてやれば、相手は何も言えないだろう。

「……何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

代表同士の対決だったら雄二に勝ち目があるとは思えないだろう。

「え？本当？」

あまりにあっさり決まったからか、明久が驚いて声をあげた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

微妙なところで根元が役に立ったな。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……」

やはり警戒されているようだ。

「なるほど。こっちから姫路か博人が出てくる可能性を警戒してい

るんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし、七伏君相手だとどうなるかわからないからね」

優子が僕のことを呼び捨てなのは、メープルと優子がよく一緒にいるので必然的に交友があるからだ。

「安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

一騎打ち五回か……。結構いけそうだね。

「ホント？嬉しいな♪」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデ　はあってもいいはずだ」

「え？うーん……」

さすがに戦争の勝ち負けが係わって　くる内容なだけに悩んでいるようだ。

「……受けてもいい」

「うわっ！」

明久は、静かに現れた霧島さんに驚いたようだ。別に驚くほどのことでもないだろうに。

「……雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件だと？」

「……うん」

霧島さんは雄二を見た後、姫路さんをみて再び雄二を見た。

「……負けた方は何でも一つ　言うことを聞く」

後ろで馬鹿二人が何かやっていたが、雄二も気にしていないようなので無視することにした。

「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

全部とはいかなかったが、妥協案が得られた。

「そのぐらいなら問題ないよね？」

「ああ。交渉成立だ」

「ゆ、雄二、博人！何を勝手に！まだ　姫路さんは了承していないじゃない　か！」

は？なんでそこで姫路さんが出てくるの？

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

姫路さんに迷惑はかけないってことは誰かが犠牲になるのか？

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

「交渉は成立したし、一旦教室に戻ろう」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

第十三問

第十三問

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はＡクラスの担任で学年主任である高橋先生が立会人を務める。

暇なのか秋音姉も教室内で観戦している。

「ああ」

「……問題ない」

一騎打ちの会場はＡクラス。オンボロ教室じゃあ狭すぎるからね。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは秀吉の姉の木下優子さん。

対するこちらは、

「ワシがやろう」

その弟である秀吉だ。
姉弟だからこそ、弱点や集中力の乱し方を知っているはず。
「ところでさ、秀吉」
「なんじゃ、姉上？」
「Ｃクラスの小山さんって知っ　てる？」
「はて、誰じゃ？」
小山ーーーＣクラスの代表で秀吉が優子の演技をして豚呼ばわりした人物。
「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」
「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」
おそらく抹殺するつもりだと思います。
「姉上、勝負はーーーどうしてワシの腕を掴む　？」
「アンタ、Ｃクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしたことになっているのかなぁ？」
「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測してーーーあ、姉上っ！ちがっ……！その関節はそっちには曲がらなっ……！」

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。

「秀吉は急用できたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

「それじゃあ、僕がいこうかな」

ハンカチで返り血を拭う優子の前にでる。

「急にこっちが代わっちゃったから、お詫びとして三対一でやらせて」

「自分がいくっす」

「では私も」

名乗り出てくるのはメープルと行平。

「ちょ、ちょっと！いくら相手が強敵だからって三対一は……」

「本気でこないと、負けるよ？それでは物理でお願いします」

「それでは召喚をしてください」

「「「「試獣召還」」」」

魔法陣が現れ、四体の召喚獣が出現する。

一体目、おなじみの僕の召喚獣。

二体目、西洋風の鎧にランスを持った優子の召喚獣。

三体目、左手に盾、右手に刀を持ち、和服姿のメープルの召喚獣。

四体目、スーツとシルクハットを装備し、手には銃のようなシルエットで、弓のようなパーツのついたーーー

「繚乱の対弩！？」

銀と金のフレームを持ったボウガン。なんであんなものを持っているんだ。

『Ａクラス　　木下優子
物理　　３２１点

Ａクラス　佐藤楓
物理　　３９８点

Ａクラス　七伏行平
物理　　３９９点

Ｆクラス　七伏博人
物理　　７９８点』

「あれ？メープルも行平も振り分け試験は調子悪かったの？」

今表示されてるのはＡクラスの人は振り分け試験の点数のままのはずだ。

いつもは４５０点ぐらいのはずなんだけど。

「ハクのことが心配だったっす」

確かにあの日は遅刻しちゃったからなぁ……。

「ありがと。それじゃあ、始めよう」

４００点いっていないというのはありがたい。４００点オーバーでなければ腕輪の使用はできないからね。

三対一は分が悪いので、やっぱり作戦はーーー

「始め！」

先手必勝だ。

一瞬で優子の前まで移動し、クローをクロスさせて全力で攻撃する。

完全な不意打ちなので、ランスの腹でかろうじて防がれたが勢いよく吹っ飛ぶ。

行平とメープルの方を見ると行平は弾の装填を終え、メープルは盾を構えていた。

『Ａクラス　木下優子
物理　　１０２点』

ふむ、一撃では倒せなかったか。

今度は盾を構えているメープルの前に行き、回り込もうとするが、行平により妨害される。

若干ぎこちない動きから、召喚獣に慣れていないことがわかる。

しかし楽観してはいられない。おそらく一分もしたら二人とも慣れてしまうだろう。

必然的に短期決戦に持ち込むしかない。

少し離れている行平に距離をつめ、クローで斬りつける。

すんでのところでかわされ、結果は肩を切り裂くだけとなった。

『Aクラス　七伏行平
物理　　２７３点』

もう一撃加えようとするが、後ろからメープルが切りかかってくる。

それをブレードで受け流し、メープルが武器を持っている右手をつかみ、行平との対角線上に動かす。

行平が放った銃弾がメープルに迫るが、盾で弾かれたので、蹴り飛ばして距離をとる。

復活した優子がランスで突進してくるが、横にステップして回避。

行平により銃弾が放たれたので、優子に追撃するのを諦めて弾をはじく。

僕は今のところノーダメージで戦っている。操作の危うい相手に対して、素早い動きの僕は戦いにくいのだろう。

僕の武器は素早さ。防具がほとんど無いかわりに、高速戦闘が可能だ。

速さに乗せれば力が弱くとも重く、攻撃に当たらなければ防御は必要ない。それが僕の戦い方。

優子とメープルが同時に攻撃を仕掛けてくる。

ランスは近い間合いだと突くことができない。

よって、優子を最初に仕留めることにした。

メープルの剣を左手で弾きながら、突いてきたランスを紙一重でかわし、その腹を踏み、地面に押さえつけてランスの動きを封じる。

無防備なその体に、ブレードを一閃。撃破する。

しかし、疎かになっていたメープルの盾による打撃と、行平の狙撃を受けてしまった。

『Ａクラス　佐藤楓
物理　３１４点
Ａクラス　七伏行平

物理　　２７３点

Ｆクラス　七伏博人
物理　　４０３点』

一旦距離をとり、再び攻撃する。

しかし、メープルは刀で防御し、クローの刃と刃の間に刀を入れてきた。

速さを充実した戦い。しかしヒットアンドアウェイではなく、勢いを殺さず流れで攻撃する。無駄を省き、攻撃を繋げているので、動きを攻撃を受け止められると動きが止まってしまう。

今がまさにそれだ。

動きを止めた僕に、行平は容赦なく狙撃してくる。

すぐに回避にうつるが、２、３発当たる。

『Ｆクラス　七伏博人
物理　　３０１点』

だいぶ慣れてきた二人は始めに比べだいぶ厄介だ。

まずはサポート重視の行平を倒すことを目標にする。

牽制で放たれる銃弾をかわし、肉薄する。

右手の攻撃は銃身で防がれるが、左手の攻撃は当たる。

しかし一人に集中することは、もう一人を疎かにすること。

メープルの刃が今にも当たるというとこで、腕輪の能力を発動する。

「来い、ジャコウアゲハ」

メープルの剣は、突然現れた蝶『ジャコウアゲハ』に防がれた。

攻撃を防がれ、無防備なところにフェイントをいれ、後ろに回り込んで蹴り飛ばす。

盾で防御姿勢をとっていたメープルは、なすすべもなく後ろをとられ、飛ばされる。

武器として昆虫を呼ぶ『昆虫召喚』。それが僕の腕輪の能力。ちなみに攻撃を受けても昆虫は死なない。

『Aクラス　佐藤楓
物理　　１６３点

Aクラス　七伏行平
物理　　４２点』

起き上がったメープルが、再び攻撃してくるが、ジャコウアゲハで防ぐ。

その間に行平にトドメをさすため肉薄する。

だがその瞬間行平は銃身を持ち、ボウガンを振り回してきた。

それを左手で受け流し、懐に潜り込む。クローを突き刺すことに成功するが、最後にカウンターとして蹴りを入れられた。

『Ｆクラス　七伏博人
物理　　２３１点』

蹴りによって少し宙に浮いたところにジャコウアゲハを振り払ったメープルが上から刀を振り下ろしてくる。

かろうじて防御に成功するが、無理な体勢な上にそのまま地面に叩きつけられてしまう。

「来い、キイロスズメバチ」

もう一度腕輪をつかい、キイロスズメバチで追撃を防ぐ。

『Ｆクラス　七伏博人
物理　　１４６点』

体制を立て直し、キイロスズメバチと共に攻撃をする。

メープルは盾で攻撃を防ぎ続けるが、腕をキイロスズメバチに噛まれ動きが阻害される。

止まったところに勢いをつけ、全力で攻撃を叩きつける。

『Ａクラス　佐藤楓
物理　　０点』

これでＦクラスの一勝目が決まった。

第十四問

第十四問

Aクラスの中でもトップクラスに対して三対一での勝利。
このことでFクラスの志気は最高潮に達していた。
「流石だな、博人」
「お褒めにあずかり光栄です、代表」
待機場所で迎えてくれた雄二とハイタッチする。
「よくやった♪さっすが博君！」
観戦していた秋音姉が頭をなでてくる。
「では、次の方どうぞ」
「私が出ます。科目は物理でお願いします」
Aクラスからは佐藤美穂さん。
「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

Fクラスからは明久が出るようだ。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりの雄二の言葉。

やっぱり明久が負けることを信じているんだろうな。

というかいまだに頭を撫でられているのは何故だろう。

「そろそろやめて？」

秋音姉は中学生と言われても納得できる容姿と身長だ。それに頭を撫でられているというのはどうも良くない。

「この撫で心地はやめられない、止まらない」

むう、撫でられると少し気持ちいいから困る。

「あれ、気づいた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

おや、明久がまだくだらない戯言を言っているようだ。

処刑準備しておくか……。

「それじゃ、あなたは……！」

なんでこんな嘘を信じるんだろう？

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕ー
ー」

大きく息を吸ってこの場にいる皆に告げてきた。

「ーーー左利きなんだ」

『Ａクラス　佐藤美穂
物理　　３８９点
　　ＶＳ
Ｆクラス　吉井明久
物理　　６２点』

一瞬で勝負が終わった。

「人がせっかく上げた志気をどうしてくれるのかな？」

「か、関節が！関節があぁぁぁぁ！」

ついでに頸動脈を絞めて意識を刈り取っておく。

「よし。勝負はここからだ」

「そうだね。これからが本番だよ」

「では、三人目の方どうぞ」

「……（スック）」

ムッツリーニが立ち上がる。
科目選択権のある今回は圧倒的にこちらが有利だ。
「じゃ、僕が行こうかな」
対してAクラスからは工藤愛子さん。　ショートカットの髪のボーイッシュな女子だ。
「一年の終わりに転校してきた工藤　愛子です。よろしくね」
「科目はなににしますか？」
「……保健体育」
ムッツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。
「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」
転校生って言っていたから、ムッツリーニの力を理解していないのだろうか？」
「でもボクだってかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技で、ね？」
実技？それってやっぱり怪我の治療とか？
「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フッ。望むところ――――――」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありませ　ん！」

「・・・・・・・・・」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔しているんだが」

明久はいつの間に復活したんだろう。

「それそろ召喚を開始してください」

「はーい。試獣召喚っと」

「・・・・・・・・・・試獣召喚」

二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を持って現れる。ムッツリーニは小太刀の二刀流。そして工藤さんは、

「なんだあの巨大な斧は！？」

見るからに破壊力満点の巨大な斧。おまけに腕輪を装備している。

『Ａクラス　　工藤愛子
保健体育　４４６点
ＶＳ

Ｆクラス　土屋康太
保健体育　５７２点』

しかし点数ではムッツリーニのが上、腕輪も両方が付けているので、点数で劣っている工藤さんの方が不利だろう。

「こ、こうなったら……（ピラッ）」

「……！（ブシャアァァァ）」

何だ！？何が起こったんだ？いきなりムッツリーニから鼻血が間欠泉のように吹き出したよ！？

ムッツリーニが鼻血で倒れている間に、工藤さんはムッツリーニの召喚獣を倒した。

……この勝負は一体何だったのだろうか。

第十五問

第十五問

「これで二体一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらから出るのは、当然姫路さんだ。

今、Ａクラスと真っ向から戦えるのは彼女のみだ。

「それなら僕が相手しよう」

Ａクラスから出てきたのは学年次席の久保利光君。

「やはり来たか、学年次席」

姫路さんに次ぐ学年トップクラスの実力の持ち主である。

明久のことが好きな同性愛者という話も聞くが、気にしないでおこう。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二が心配するのは、姫路さんと久保君の実力がほぼ互角だからだ。
互角の戦いでは、負ける可能性も大ということだ。
「科目はどうしますか？」
雄二が科目選択をするので、今回こちらは科目選択をできない。
「総合科目でお願いします」
総合科目。科目を選べるなら、自分の得意なものを選ぶのは定石だが、久保君はここで実力をハッキリさせたいと思っているのだろうか。
「それでは……」
「「試獣召喚っ！」」
『Ａクラス　久保利光
総合科目　３９９７点
ＶＳ
Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　４４０９点』
決着は一瞬でついた。
『マ、マジか！？』
『いつのもにこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

至る所から声があがる。

点数差が４００点オーバーなのだから無理も無い。

「ぐっ……！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Ｆクラスが」

「Ｆクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

まあ、人の（不幸）の為に行動するのはよく見かけるね。

「これで二対二です」

高橋先生にも若干変化が見られた。ＦクラスがＡクラスと渡り合っていることに戸惑っているのだろうか？

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Ａクラスからは代表の霧島翔子さん。

対するこちらからは当然、

「俺の出番だな」

Fクラス代表、坂本雄二だ。ここまでは作戦通り。

「教科はどうしますか？」

霧島さんが負けるわけないと思っているのか、Aクラスの皆は特に騒いでいない。

深く考えれば危機的状況だと思うけど。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが広がる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル、万点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じて、高橋女史は教室を出ていく。

その背中を見送り、雄二に近づく。

「最終決戦。頑張って」

「ああ、勝ってみせるさ。」

手を挙げて思いっきりハイタッチする。

「雄二、後は任せたよ」

「ああ、任された」

明久が差し出した手を、雄二はグッと握る。

次にムッツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……（フッ）」

口の端を軽く上げ、ゆっくりと戻っていく。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ！」

高橋先生が戻って来て、雄二と霧島さんに声をかける。

そして、決戦の会場へと向かった。

僕達はモニターで視聴覚室の様子を見る。

『では、最後の勝負、日本史テストを行います。制限時間は５０分、満点は１００点です』

画面の向こうで日本史担当の先生が問題用紙を二人の机においた。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているさ』

『では、初めてください』

二人により、問題用紙が表にされる。

そして、ディスプレイに問題が表示される。

平城京、平安京、鎌倉幕府ーーーー大化の改新

「あ……！」

「よ、吉井君っ

「うん」

「これで、私たちっ……！」

「うん！これで、僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

Fクラス皆が声を揃える。

「最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ！！」

『うおぉぉおおおおお！！！』

Fクラスの面々が、歓喜の雄たけびを上げた。

しかし、ついさっき重要なことに気づいてしまった。僕は苦笑いしかできない。

（あれだけ自信満々だったから忘れてたけど、雄二が百点取れなかったら意味ないよね？）

「あれ？どうしたの博人？せっかくの勝利なんだから、もっと喜ぼうよ」

少し変な僕の様子に気づいたのか、明久が声をかけてくる。

「水を差すようで悪いけどさ、雄二はこのテスト百点とれるんかね？」

「ははっ、まさかそんなーーーー」

＜日本史勝負　限定テスト　１００点満点＞

『Ａクラス　霧島翔子　９７点』

ＶＳ

『Ｆクラス　坂本雄二　５３点』

Ｆクラスの卓袱台が、みかん箱になった。

第十五問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第十六問

第十六問

「三対二で、Ａクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだＦクラスの面々に対する高橋先生の締めの言葉。

まさかこんなことが予想通りになってしまうとは・・・・・

「・・・・・雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島さんが歩み寄る。

「・・・・・殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

雄二に制裁を加えようとしている明久にあるものを渡す。

「はい、ナイフ」

別に殺傷用ではなく、いざという時の十徳ナイフだ。

「吉井君、落ちついてください！」

ナイフを受け取ろうとした明久に姫路さんが後ろから抱きついた。
「だいたい、５３点ってなんだよ！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だとーーー」
「いかにも俺の全力だ」
「この阿呆がぁーっ！」
「アキ、落ち着きなさい！　アンタだったら、３０点も取れないでしょうが！」
「それについては否定しない！」
「もしくは『否定できない』、だね」
「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」
「くっ！と何故止めるんだ姫路さんに美波！　この馬鹿には喉笛を斬り裂くと言う体罰が必要なのに！！」
「それって体罰じゃなく処刑です！　」
「明久、ナイフは使い終わったら返してね。明久も負けたんだから同罪だし」
「ドンマイ雄二！気にするな！」
切り替え速いな。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けていた」

「言い訳はしねえ」

つまり図星だと。

「……ところで、約束」

「……！（カチャカチャカチャ！）」

霧島さんの言葉で、突然ムッツリーニと明久が撮影準備を始めた。

そういえば僕もメープルと約束してたな。どんな要求なのだろう。

「……それじゃーー」

霧島さんは小さく息を吸って、

「……雄二、私と付き合って」

言い放った。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」
「拒否権は？」
「……ない。約束だから。今からデートに行く」
「ぐぁっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことにーーー」
ぐいっ　つかつかつか
霧島さんは雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った。
「……」
「……」
「……」
しばしの沈黙が教室に訪れた。
今の出来事に言葉が出ないようだ。
「さて、Ｆクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」
それを破ったのは、とある教師の声。
「あれ？　西村先生。僕らに何か用ですか？」
「ああ。今から我がＦクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

『我が』Ｆクラス、ということはーーー

「西村先生。もしかして担任が福原先生（現担任）から西村先生に変わるんですか？」

「そのとおりだ。良かったな、お前ら。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにぃ！？』

クラスの男子生徒から悲鳴があがる。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Ｆクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、ないがしろにしていいものじゃない」

負けた僕達には言い返す言葉もない。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の《観察処分者》とＡ級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！　なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「・・・・・お前には、悔い改めるという発想はないのか」

明久はああ言っているが、実際は次の試召戦争に向けて勉強する気だろう。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

放課後こそ学園生活を最も満喫できる時間なのに・・・・・・。

それに、もし休日まで補習を入れられたら、昆虫採集の時間が減るじゃないか！

こうして、僕らの最初の試召戦争は憂鬱を残して終わった。

第十七問

第十七問

戦争が終わった日の、七伏家。

リビングに、僕、行平、メープルが集まっていた。

「いや～、楽しかったね試召戦争」

「うん。いろいろあったけど、本当に楽しかったよ」

「そうですね。本気で戦うというのは気分の良いものです」

あ、そういえばーーー

「メープル、あの約束は？」

「私の言うことを聞いてくれるんだよね？」

「賭は僕の負けだからね」

「それじゃあ、今から私が言うことに、逃げないで、正直に応えて。それがお願い」

それぐらいならおやすいご用だと、首を縦にふる。

「あのね……私はハクのことが、小さい頃から好きだったの。だから、付き合ってほしいのだけど」

……え？

好き？あの可愛くて綺麗で明るくて優しくて勉強もできる通称メープルこと佐藤楓が僕のことを？

……ハッ！少しトンでしまった。

これに逃げずに正直に応える。それが僕のとる行動。

少し息を吸って、答える。

「僕も、小さい頃から、メープルのことが好きだったーーーと思う」

「『思う』？」

「自分のことは良くわからないからね。けど、僕はメープルのことが好きだといえる」

「そう。それじゃ、その思いを確信にしてあげる」

そういって、僕の前に来て唇を合わせてきた。

「それじゃあ、また明日。ユキ、それと私の恋人さん♪」

メープルはそういい残して、去っていった。

ちなみにユキとは行平のことだ。

その後5分間僕は顔を真っ赤にしたまま、唇に手を当てたまま動けなかった。

ちなみにその日は危なっかしくて任せられないということで台所から追い出された。

設定？

設定？

『七伏博人』（ななふしはくと）

身長１６１ｃｍ　幼い顔立ちなので、小さい印象を受ける
得意科目：理数系、特に生物が飛び抜けている。
趣味：昆虫採集、科学系の本の読書
特技：運動全般（人並み以上）、記憶、ポーカー
好きな物（事）：昆虫、甘いもの、疑う事、科学、難しい事
嫌いな物（事）：苦い物、信じる事
召喚獣：クロー、足の鉤爪、肘のブレードが武器。
　防具は脛のアーマーのみ。
　腕輪は『昆虫召喚』で、武器として昆虫を召喚し、自由に操る。
その他：周りを気にせず我が道を行く。『信じるよりも疑う方が確実に真実にたどり着ける』という。『昆虫少年』や『速攻』の二つ名がある。折りたたみ式の捕虫網を常時装備。

『佐藤楓』（さとうかえで）通称メープル
身長：１５９ｃｍ
得意科目：国語、英語
趣味：読書、折り紙
特技：速読、細かい作業
好きな物（事）：文学、よく考える事、博人
嫌いな物（事）：付和雷同

召喚獣：着物（防御力高）、盾、刀
その他：瑞希ほどではないが、スタイルが良く、人気がある。『～っす』という口調はキャラ作り。結構な策士。博人を逃げられなくするように、日々策を練っている。

『七伏行平』（ななふしゆきひら）
身長：１７８ｃｍ　博人とは反対で大人びた印象を受ける。
得意科目：社会系
趣味：散歩、旅行
特技：投擲、弱点探し
好きな物（事）：歴史や文化、面白い物
嫌いな物（事）：平穏すぎること
召喚獣：スーツとシルクハットを装備し、ライトボウガンが武器。
その他：博人の双子の兄。丁寧な口調に反して、弄るのが好きなＳの人。面倒見がよく、好かれやすい。

『杉本秋音』（すぎもとあきね）
身長１４１ｃｍ　中学生のような容姿
趣味：物体の運動観察
特技：球技、暗算
好きな物（事）：科学、のんびりする事
嫌いな物（事）：面倒事
召喚獣：白衣にツインチェーンソー
その他：二年Ｆクラスの副担任。小さい身長に対してスタイルは良い。のほほんとした雰囲気。

～僕とメープルと殲滅戦～（前書き）

今回は短編です。

～僕とメープルと殲滅戦～

短編～僕とメープルと殲滅戦～

明久がラブレターを貰うという騒動の翌日、僕はいつも通り三人で登校していた。

「ところで、お二人はどうですか？どこまで行きました？」

「ぶっ……なんてことを聞くんだか」

「まだキスだけという残念なかんじ」

「おや、残念。良い感じでいじれるかと思ったのですが」

そんなとき、僕達の話を聞ける距離に誰かの足音が聞こえた。

「あれ、雄二。おはよう」

その人物は、Ｆクラス代表坂本雄二だった。

「雄二君じゃないっすか。おはようっす」

メープルは他の人が来たので、『～っす』という口調になっていた。

その後雄二も交えて雑談しながら学校へと向かった。

「工藤」「はい」「久保」「はい」
毎朝の恒例行事の出席確認。
「近藤」「はい」「斉藤」「はい」
いつも騒がしい教室にのどかなひとときが訪れている。
今日は平穏に過ごせーーー
「坂本」「……博人が佐藤楓と付き合い始めたようだ」
『殺せぇぇっ！！』
そうもなかった。
「やっぱり聞いていたんだね、雄二」
あのときもっと速く雄二の気配に気づくべきだった。
『以前からイチャイチャしてやがったが、付き合い始めるなんて』
『これはもう殺すしかないな』
『弁明の余地はないな』
「手塚」「七伏コロス」「藤堂」「七伏コロス」

「返事は『はい』だ！」

西村先生が殺意をこめた返事をした奴らを注意する。

「ちょっと待って先生！昨日はそんなこと言わなかったよね！」

昨日明久はまったく同じ展開になったが、そこは生活態度の差だろう。

出席確認が終わり、西村先生が出席簿を閉じる。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

教室を出て行く西村先生に、後ろからついていく。

西村先生のいる状態では手が出せないのか、Ｆクラスの連中も攻撃してこなかった。

そのまま職員室前まで行き、次の授業の先生と一緒に教室に入った。

そんなことを繰り返してなんとか昼休みまで逃げ切った。

時間はたっぷりあるので、殲滅を開始する。

「見つけたぞ！誰か応援にぶへっ！」

早速一人目が来てくれたので、注意がそれた隙に足を払い転ばせる。

手足を縛ってから西村先生に連絡し、補習室に送る。

「いたぞ！B部隊に連絡して挟み撃ちにするぞ！」

昨日と同じく部隊編成までしている。

少し厄介なので、ダッシュして逃げる。

僕を追うためにバラバラになった奴らを一人ずつ縄で縛り、補習室に送ってやる。

これで雑魚は殲滅完了。

そんな時、いやな気配を感じて横に動くとしさっきまで立っていた場所にペンが刺さっていた。

「……裏切り者には、死を」

文房具を手に構えてこちらを狙っているのは、ムッツリーニ。動きが素早いので、敵の中では一番厄介だ。

「いくよ、ムッツリーニ」

「……次はカッターを投げる」

脅迫は気にせずつっこんでいくと、宣言通りカッターを投げてくるが、刃が出ていないので手で弾く。ムッツリーニが次の行動に移る前に足払いをして、転ばせてから縛りあげる。

昼食をゆっくり食べるため、早めに殲滅することにし、敵を探していると木刀を持った須川がいた。

「ここまでだ、七伏！」

「うっさい速くくたばれ」

腰から取り出した捕虫網の柄で須川の木刀を弾き飛ばし、やっぱり足払いで転ばせてから縛る。

「ぐふぅ！」

丁度良くバカが現れたので、何か言う前に潰した。

これで残るは後一人、坂本雄二だ。

これは一番簡単に始末できるので、わざと最後に回した。

携帯電話を取り出し、ある人物にかける。

「あ、もしもし。霧島さん？雄二が霧島さんと昼食を食べたいんだって。恥ずかしがり屋だから霧島さんから迎えにいってあげて」

はい終了。

「ハク！大丈夫だったすか？」

「いやはや、面倒なことになりましたね」

丁度メープルたちと合流できたので、昼食を食べるために、Ａクラスに向かう。

メープルとの関係がばれたのは予想外だったけど、これはこれでいいんじゃないかな。

第十八問

第十八問

とある日の七伏家。

居候である杉本秋音が、僕、行平、メープルをリビングに集めた。

「皆さんには重大な話があります」

「一体何ですか？」

行平が聞くと、秋音姉が自信満々に答えた。

「いやあ、実は私ね、試験召喚システムの腕輪の開発を手伝ってたの～。そこで、清涼祭の『召喚大会』の賞品として学園長の作った『白金の腕輪』とは別に『黄金（こがね）の腕輪』っていうのを作ったんだけど、欠陥があってね～」

「それで、欠陥はどんなものなの？」

暴走が起きたりするのだろうか？

「５００点以下の点数で使うと９９，５％の点数を失っちゃうんだよ♪」

「酷すぎる！」

たとえ４００点とっても、使った瞬間２点になるとか不良品すぎだ。

「というわけで、君たちには私のミスをもみ消して欲しいのだ♪」

「今さらっと大人の事情を言いましたね」

失敗の隠蔽とかなんてことを頼むんだこの人は。

「君たちなら、得意科目はよゆーで５００点突破してるもんね」

「その依頼の私達メリットは？」

そうメープルが聞くと、フッフッフと笑ってから、

「優勝者には『如月ハイランド』のペアチケット二枚が進呈されちゃいます！」

「絶対やってみせる」

メープルは即答していた。

「え？どうしたのそんな急に？」

「博人、つまりこういうことです。メープルは博人と如月ハイランドでデートがしたい、と」

「ほえ？そんな・・・・・」

「まったく、博人は恋愛事の話に弱すぎです。反応が面白すぎて弄りたくなってしょうがありません」

最近は恋愛事の話になると赤面したり言葉がでなくなることで、頻繁に行平にいじられている。

行平は丁寧な口調とは裏腹に、弄るのが好きなSなのだ。

「ちなみに、企業側が訪れたカップルを無理やり結婚させようとしてるって噂もあるよ」

「これはもう受けるしかないわ。この依頼」

結婚・・・・・かぁ。

「さて、博人が処理落ちしかけていますが、召喚大会はペア出場ですよね？どう組み合わせるんですか？」

「私としては、近接型の博君と、遠距離型の行君のペアが良いと思うな」

「それじゃあ私は他の人を誘ってみる」

どうやら、方針は決定したようだ。

「んじゃ、これで解散！」

こうして召喚大会の出場が決定した。

……その後いろいろ面倒事を押しつけられたけど。

第十八問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1495ba/

バカと速攻と昆虫少年

2012年1月4日03時52分発行